

父から受け継いだものを受け継がなかったもの

——エルンスト・ビューヒナーの鑑定書
及びそのゲオルク・ビューヒナーへの影響の考察——¹⁾

竹内 拓史

1

戦後の「ドイツ語圏文学の最も重要な賞」²⁾であるゲオルク・ビューヒナー賞にその名を冠する19世紀初頭の作家ゲオルク・ビューヒナーは³⁾、ドイツ語圏の最も重要な作家の一人と目されている。たとえばヴァルター・イェンスは、彼の作品が持つアクチュアリティについて、「この劇作家は、カフカの視点を先取りするような優れた鋭さと正確とでもって、社会に必然的に生じる人間の疎外現象を、人間が人工的で不自然に、そして機械的でこれ以上無いほど図式的に反応するところを通して描いた」⁴⁾と述べ、そこにカフカやブレヒトにまで繋がる現代性を看取する。さらにイェンスは「改めて問おう、この24歳の社会学者で解剖学者の詩人はどれだけ時代を先取りしていたのだろうか！彼の時代？それとも我々の時代までも？さらに先の時代に新しい技法を発展させると、それもまたすでにビューヒナーに先取りされていたということはあ

1) 本研究はJSPS 科研費JP15K02419の助成を受けたものです。

2) Ulmer, Judith S.: Geschichte des Georg-Büchner-Preis. Soziologie eines Rituals. Berlin, New York 2006, S.1.

3) ゲオルク・ビューヒナー賞が戦後「最高の文学賞の地位を獲得した」理由は、ビューヒナー文学の再評価の高まりに加え、ナチス時代の1933年から1945年にかけて表彰を行わなかったことや、ビューヒナー賞の後援者であったヘッセンの政治家ヴィルヘルム・ロイシュナー、テオドール・ハウバッハ、カルロ・ミーレンドルフがその間に当局に対する抵抗のため犠牲になったことなどが挙げられる。(Vgl. Büchner-Preis-Reden 1951-1971. Hrsg. von der Deutschen Akademie für Sprache und Dichtung, Stuttgart, Philipp Reclam jun. 1972, S. 7ff.)

4) Jens, Walter: Schwermut und Revolte: Georg Büchner. In: Von deutscher Rede. Erweiterte Neuausgabe. München, Zürich 1983, S. 115.

り得るだろうか?」⁵⁾と述べ、ビューヒナー文学の「将来性」にまで言及する。

一方でビューヒナーの本職が作家ではなく解剖学者であったこともまたよく知られるところである。カール・フィエトアは、ビューヒナーが「すでに早くから自然科学の道に進む決心をしていた」⁶⁾と指摘しているが、ビューヒナーが大学で医学を学び、23才の若さでチューリヒ大学に比較解剖学の分野で専任講師の職を得ていることからそのことは理解できる。彼が当初医学を志した理由をビューヒナー家の家系に求めることは妥当であろう。すでにビューヒナーの曾祖父が外科医をしており、父のエルンスト・ビューヒナーはヘッセン大公国の高級医官を務めていた⁷⁾。また母方の祖父(エルンストの義父)も医者であり、エルンストは彼の病院で一時期働いていた。エルンストは、6人いた兄弟の中でも特に長男であるゲオルクに時に過激とも言える英才教育をおこなっており、後に見るように実験用の犬の世話をゲオルクにさせたり⁸⁾、大学でおこなわれていた人体解剖に大学入学前のゲオルクを連れて行ったりしている⁹⁾。ゲオルクが大学で医学部に入ることは、ビューヒナー家にとっては既定路線だったと言っているだろう。

しかし最終的にゲオルクが選んだ仕事は、ビューヒナー一家が代々家業としてきた医者ではなく解剖学者であった。自然科学研究という分野で括ってしまうと、この二つの職業は確かに同じ分野になるため、これまで彼が比較解剖学という研究者の道を選んだ理由や、ビューヒナー一家が代々就いてきた実務的な医者の道を選ばなかった理由については、せいぜい当時最先端の分野であった比較解剖学の研究に熱中したのであるという推論が成り立つくらいで、詳しく言及されることはなかった。だが本論では、その理由として父エルンストの影響と彼からの離反があることを示したい。

そのために本稿ではまず、これまでほとんど言及されてこなかった父エルンスト・ビューヒナーによる患者の鑑定書の内容と特徴を検討し、エルンストの思想を明らかにする。そのうえでそれらが息子のゲオルクに与えた影響について考察し、ゲオルク・ビューヒナーが医学の道を選ばなかった理由として一つの仮説を示したい。

5) Ebd., S. 132.

6) Viëtor, Karl: *Büchner. Politik·Dichtung·Wissenschaft*. Bern 1949, S. 216.

7) Mayer, Thomas Michael: *Georg Büchner. Eine kurze Chronik zu Leben und Werk*. In: *Georg Büchner I / II*. Hrsg. von Heinz Ludwig Arnold, München 1979 (= *Chronik*), S. 360.

8) Boehncke, Heiner und Sarkowicz, Hans: *Nachwort*. In: *Ernst Büchner. Versuchter Selbstmord durch Verschlucken von Stecknadeln*. Hrsg. von Boehncke, Heiner und Sarkowicz, Hans, Berlin 2013, S. 127.

9) Ebd., S. 125.

2

エルンスト・ビューヒナーの鑑定書について検討する前に、まずその経歴について重要な点だけ簡単に確認する¹⁰⁾。

エルンストは、1786年8月3日に父ヤーコプと母マグダレーネの間に8人兄弟姉妹の5番目として生まれた¹¹⁾。彼の経歴で重要なことのひとつは、オランダで高等教育を受けた後に、オランダ軍に衛生兵として入隊したことである。というのも、この軍は後にオランダとフランスの連合軍となり、エルンストは5年あまりナポレオン軍とともにヨーロッパを巡ることとなるからである¹²⁾。エルンストがヘッセン大公国に仕えながらも密かにナポレオンとフランス文化虜員であったことは、後に息子たちが語っていることで知られているが¹³⁾、これは彼がナポレオン軍に従軍したことが影響していると考えられる。エルンストの息子でゲオルクの弟の一人アレクサンダーは、小柄という共通点も父がナポレオンに共感した理由の一つではないかと推測している¹⁴⁾。この他にも彼がナポレオンに傾倒していたことを示す一例として、ヘッセン大公国の君主に招かれた舞踏会でナポレオンの仮面をしたという話も挙げられるが¹⁵⁾、この噂がもし本当であれば、後述するように政治的事柄に敏感で慎重なエルンストにしては非常に大胆な行動であり、彼のナポレオン熱は相当のものだったと推測される。

従軍後にエルンストがパリで医学を学んだ可能性が指摘されているが、大学の証明書などはこれまでのところ見つかっていない¹⁶⁾。従軍後のことでまず分かっているの

10) エルンストの経歴については、以下を参照した。Mayer, Thomas Michael: *Chronik, Hauschild, Jan-Christoph: Georg Büchner. Biographie.* Stuttgart, Weimar 1993 及び Boehncke, Heiner und Sarkowicz, Hans: *Nachwort.* In: Ernst Büchner. *Versuchter Selbstmord durch Verschlucken von Stecknadeln.*

11) 本論とは直接関係ないことであるが、エルンストの父ヤーコプは三回結婚し、そのいずれの妻とも死別している。(Vgl. インターネットサイト Hessische Biografie. 「Büchner, Johann, Jakob Karl」の項 (最終閲覧日 2020年1月31日) <https://www.lagis-hessen.de/de/subjects/idrec/sn/bio/id/7628>)

12) エルンストはこの従軍中の1807年にシュトラールズントでスウェーデン軍と闘っている。ビューヒナーの戯曲『ヴォイツェク』のモデルとなった実在のヴォイツェクも1807年にシュトラールズントでスウェーデン軍と戦ったという記録があり、彼の方はその時スウェーデン軍の捕虜となっている。すでにここでヴォイツェクとビューヒナー家は接点があったことになる。(Vgl. Hauschild, Jan-Christoph: a. a. O., S. 25.)

13) Boehncke, Heiner und Sarkowicz, Hans: a. a. O., S. 120f.

14) Ebd., S. 121.

15) Hauschild, Jan-Christoph: a. a. O., S. 9.

16) Boehncke, Heiner und Sarkowicz, Hans: a. a. O., S. 121.

は、オランダに戻り民間の救護業務についた後、1811年にヘッセンに戻りギーセンの大学で内科医の試験を受けたが、経験が足りず外科医と産科の博士号のみの取得にとどまったということである。内科医の博士号を取得したのは、1815年のことだった。

1812年初頭からゴッデラウの病院に勤めたが、ここには精神病患者が収監されており、エルンストが精神病者に興味を持つ最初のきっかけになったと考えられる。また同年10月に、当時勤めていた病院の医院長ヨハン・ゲオルク・ルイスの娘ロイス・リーゼと結婚する。その後生まれる長男の名前はこの義父からとったのだろう。この義父はヘッセン大公国の役人でもあり、またゴッデラウの参事官も務める町の有力者だった。この義父は後に宮廷顧問官にまでなりシュトラースブルクとのコンタクトもあったことから、ゲオルクがこの地に留学できたのは彼のコネクションだったと推測される¹⁷⁾。

結婚後は義父のいるゴッデラウに引っ越し、そこの管区医官になる。ゲオルクが生まれた(1813年)のはこの地にいる時である。義父が亡くなった翌年の1816年末にダルムシュタットで国家医師のポストを得てその間次男ヴィルヘルムが、その後ゴッデラウで長女マティルデが、ダルムシュタットで次女リーゼと三男ルートヴィヒ、四男アレクサンダーが生まれた。カールという男の子もいたが、ビューヒナーが五歳の時に亡くなっている¹⁸⁾。

エルンストは出世を重ね、1854年にはヘッセン大公国の上級医学参事官局の臨時局長にまでなり、大学で医学の講義も引き受けていた。当時の局長の死後もエルンストは局長になることを固辞し臨時局長に留まり続けたという。1858年には大公から功労賞として騎士十字功労賞を授与されたが、それでも彼が局長の座に就くことを断り続けた理由は、長男のゲオルクが政治犯として指名手配されたことに加え、三男ルートヴィヒや四男アレクサンダーも政治的な活動をしていたことが理由であったと考えられる¹⁹⁾。エルンストが1861年5月19日に死ぬまで局長のポストは空のままだったことから、息子たちの反社会的とも言える政治活動にもかかわらず、彼を差し置いて他の者を局長にすることがためらわれるほど、大公国における彼の地位は確固たるものだったことが分かる。

上述のようにエルンストは確かにナポレオン最良ではあったが、これらの経歴から

17) Ebd., S. 122.

18) 『レンツ』の幼子が死ぬモチーフにカールの死が影響している可能性が指摘されている。Ebd., S. 122.

19) Ebd., S. 122f.

も分かるように、ゲオルクをはじめとした息子たちとは異なりあからさまな反権力志向は持っておらず、少なくとも外面的には大公国の政治体制に順応した保守的な人間だったと言えるだろう。しかしゲオルクが父エルンストに宛てた手紙にはかなり率直に政治的問題について書かれており²⁰⁾、弟のヴィルヘルムが後に書いているように「自由な家庭の気風」で政治に関してある程度自由な意見交換がなされていたとも考えられる²¹⁾。もちろんビューヒナーは、両親に宛てた手紙で、自分の政治的関心を隠すような手紙も書いており²²⁾、父親が国に仕える身であり、少なくとも政治に関しては父と自分は異なる人間であることを十分認識していたと考えられる。

医学に関しては、既に述べたようにエルンストは長男であるゲオルクに英才教育をほどこした。例えば、ゲオルクをシュトラースブルク留学に送る直前の1831年11月に、駆け出しの医者向けに大学で行っていた解剖学と生理学の講義に連れて行ったという。医学部では当然死体の解剖が教育のため必要であったが、そこに解剖のためまわされてきた死体は最下層の人々や犯罪者のものであった。18歳のゲオルクは彼らの死体を見て、単なる医学的知識を得ただけでなく、社会の現実、さらには人が最も目を背ける死という現実を目の当たりにしたことであろう²³⁾。また後に見るように、エルンストは医学的なことは、異常な病的兆候や身体的なことはもちろん、性的なこともタブーとはせず記述した²⁴⁾。ハウシルトの言うように、その徹底して客観的であ

20) ポーランド独立戦争の英雄ラモリーノを熱狂的に迎えるシュトラースブルクの様子を綴った手紙(1831年12月)や1833年4月のフランクフルト暴動を伝える手紙(1833年4月5日)、社会を変革するためには大衆の窮乏が必要であると書いた手紙(1833年6月)などがこれにあたる。

21) Vgl. Büchner, Georg: Werke und Briefe. Gesamtausgabe. Wiesbaden 1958, S. 567. und Boehncke, Heiner und Sarkowicz, Hans: a. a. O., S. 123. (日本語訳は『ゲオルク・ビューヒナー全集——全二巻』(日本ゲオルク・ビューヒナー協会有志誌 鳥影社, 2012年)第二巻272頁。)

22) ゲオルクは家族にあてた1833年6月の手紙で、「今後も僕がギーセンの田舎政治や革命ごっこに加わることはありません。」(Büchner, Georg: Sämtliche Werke und Schriften. Historisch-kritische Ausgabe mit Quelldokumentation und Kommentar (Marburger Ausgabe) Bd. 10. 1, 2012 Darmstadt, S. 21. 日本語訳は『ゲオルク・ビューヒナー全集——全二巻』第二巻, 59頁)と書いているが、翌年3月にギーセンに政治的秘書結社「人権協会」を自ら提唱し設立する。その後故郷のダルムシュタットに帰り、4月にはそこにも「人権協会」の支部を設立している(Vgl. Mayer, Thomas Michael: Chronik, S. 370ff.)。またヴィルヘルムによると、エルンストは息子ゲオルクが人権協会を設立したことやその活動、さらに『ダントンの死』を執筆していたことも、まったく知らなかったという。

(Vgl. Büchner, Georg: Werke und Briefe. Gesamtausgabe. Wiesbaden 1958, S. 567.)

23) Vgl. Boehncke, Heiner und Sarkowicz, Hans: a. a. O., S. 125.

24) Hauschild, Jan-Christoph: a. a. O., S. 10f. und Boehncke, Heiner und Sarkowicz, Hans: a. a. O., S. 126.

ろうとする父親の観察態度から、ゲオルクは科学的な視点で正確にものごとを把握し叙述することも学んだと考えられる²⁵⁾。

またベンケとサルコヴィッツは、ビューヒナーが戯曲『ヴォイツェク』を書くきっかけとなり、そこから多くを引用した「ヴォイツェク鑑定書」²⁶⁾の鑑定人クリスティーン・アウグスト・クラールスとエルnstを比較し、「道徳的しきたりや法学的に罰することに執着することによって、医学的現象についての知見が曇らされることはない」エルnstは、クラールスより「寛容で人間的」とであると主張する²⁷⁾。「ヴォイツェク鑑定書」は、1821年に内縁の妻を殺害し逮捕されたヴォイツェクが、その異常な言動のため責任能力の有無を問われた際の鑑定書であり、この精神鑑定を行なったのがクラールスである。彼に責任能力ありと判定されたヴォイツェクには死刑判決が下されたが、死刑執行当日に責任能力を疑わせる新たな証言が出てきたため再鑑定の必要性が訴えられ、それが認められた。後日クラールスが二度目の鑑定を行なうも、再度責任能力ありと判定され、ヴォイツェクは1824年8月に処刑された。

エルnstがクラールスより「寛容で人間的」とであるという見解は、ヴォイツェクの責任能力に疑問があったにもかかわらず、社会的要請を考慮してクラールスが彼を有罪にしたということを前提にしていると考えられる。その前提が妥当かどうかはここでは問わないが、次章でエルnstの鑑定書のいくつかを見ながら、はたしてエルnstを「寛容で人間的」な人物と呼ぶことが適当なのかについても検討したい。

3

エルnstによる鑑定書は1824年から1826年の間に二種類の雑誌に公表した六編が見ついている。彼は法医学者として多くの裁判や鑑定に関わっており、それ以外にも鑑定をおこなっていたようであるが、少なくとも筆者は六編以外の鑑定書を確認できていない²⁸⁾。

本稿ではそれら六編のうち「留め針の嚙下による自殺の試み」を主に検討し、補足的に「職務中に上司に暴行をふるったある兵士の精神状態について」と「運良く成功

25) Ebd.

26) 日本語では「クラールスの鑑定書」と訳されることもある。

27) Boehncke, Heiner und Sarkowicz, Hans: a. a. O., S. 126f.

28) 筆者は2016年にマールブルクのビューヒナー研究所を訪れビューヒナー関連資料の目録を調べたが、そこでもエルnstの鑑定書は六編以外確認できなかった。

した自己去勢の観察」の二編も取り上げる²⁹⁾。

「留め針の嚙下による自殺の試み」の内容は以下のとおりである³⁰⁾。

1823年2月20日、恋人との別れを理由に18歳の女性が自殺をはかったものの思い直し、エルンストに助けを求めに来た。彼女は少なくとも4日間で30本の留め針を飲み込んだので、開腹してそれを取り出して欲しいという。彼女が訪ねてきた時のことをエルンストは次のように書いている。

そのような申し出をされて私は驚いてしまい、椅子をいくぶん横にずらしてしまった。危うく笑い出すところだった。だが申し出をした女性に私は答えねばならなかった。そこで真剣な表情をして、彼女に様々な質問をした。³¹⁾

エルンストはまるで「警察の尋問のように」³²⁾宗教や住まい両親についてなど次々と質問をする。彼女は用意周到にも、自殺は思い直したので胃を切り開いてもいいように24時間絶食してきたというが、半信半疑のエルンストは手術をする必要を認めず、腹に穴を開け胃を摘出しなければならぬと脅し、それでもよければ午後にもう一度来るようにと彼女を帰す。エルンストの予想に反し、彼女は手術を望みエルンストを再訪するが、エルンストは居留守を使い手術をしなかった。その後彼女の両親に確認すると、彼らは娘の言ったことは信じていいと言う。

21日から三日連続で彼女はエルンストを訪ね、その間エルンストが下剤を処方すると、24日に20本の針が出てきたと言ってエルンストのところへ持ってきた。二時間

29) これら三編の内、「留め針の嚙下による自殺の試み」と「職務中に上司に暴行をふるったある兵士の精神状態について」は、医学雑誌、*Zeitschrift für die Staatsarzneikunde* に掲載されたが、クラールスの「ヴォイツェク鑑定書」もこの雑誌に掲載された。特に「職務中に上司に暴行をふるったある兵士の精神状態について」は、第二の「ヴォイツェク鑑定書」と同じ年に、*Zeitschrift für die Staatsarzneikunde* に掲載されたため（号は異なる）、既に当時ビューヒナー家でヴォイツェク事件について話題になった可能性が指摘されている。（Vgl. Bieber, Hugo: Wozzeck und Woyzeck. In: Das literarische Echo. 16. Jg. Heft 17. 1914, S. 1191.）

30) 以下鑑定書の内容については、Boehncke, Heiner und Sarkowicz, Hans: a. a. O. の5頁以下による。

31) Büchner, Ernst: Versuchter Selbstmord durch Verschlucken von Stecknadeln. Hrsg. von Boehncke, Heiner und Sarkowicz, Hans, Berlin 2013, S. 5.

32) Vgl. Spiegel, Hubert: Das Experiment mit der Nadelperson. In: FAZ.NET（最終閲覧日2020年1月31日）<https://www.faz.net/aktuell/feuilleton/buecher/rezensionen/belletristik/ernst-buechner-versuchter-selbstmord-durch-verschlucken-von-stecknadeln-das-experiment-mit-der-nadelperson-12107652.html>

ごとに4錠を飲むように言ったにもかかわらず、彼女は一気に110錠の下剤を飲み、前夜5~6回トイレに行って、朝20本の針を見つけたという。エルンストがそれを調べるとそのうち18本は黒く酸化していた。その後も数日間彼女は針を持ってきてその数は合計40本以上となった。彼女はその間も腹部に痛みを訴えていたが、彼女が飲んだ針はそれでほとんどすべて排泄されたと考えられた。

エルンストは今回のことは本当のことであると推測し、彼女が針を飲み込んだ理由として、自分でも自分が何をしているか分からなくなってしまうような狂気や、不誠実な恋人をおびえさせ引き戻す意図の存在の可能性を検討する。またそれ以外の検討事項として「これだけの量の針を彼女が主張するような方法で飲むことができるのか」や「44本もの針が健康な人の胃や腸に数日間留まった場合、何の影響も与えないということはあり得るのか」、「同じような状況・方法で死に至ることはあるか」といった医学的な問いから、「針が排出されず患者が開腹を要望したら、手術をしたと嘘をついて他の針を見せることは有用なのか、また許されるのか」という倫理的問いを含んだものまで、全部で9項目の問題を設定し考察する³³⁾。彼はそれぞれの問題に心理学的、生理学的、病理学的、治療学的な回答をするのは差し控え、気がついたことのみを記すと書きながら、過去の事例をいくつも引用しながら詳細に分析する。また犬に針を入れた餌を食べさせ、排泄の経過を観察し、最後には解剖して観察する。その結果犬が飲んだ針はすべて排便され、痛みを持っていた様子も見られず身体的に大きな影響はなかったと判断する。彼はここから彼女が訴える痛みは、彼女の想像力によるものではないかと推測する。また犬が排泄した針の酸化状態や、飲んでから排出されるまでの期間が彼女とおおよそ同じであったことから、総合的に見て彼女の話には正当性があるとエルンストは判断し、3月31日に鑑定書を書き終えた。

しかし話はこれで終わらなかった。エルンストのこの鑑定書には「補足」があり、それによると鑑定書を書き終えた直後の4月2日に彼女が再びやってきて、前回の診察後数日間で数種類の針を合計200本飲んだうえ、昨日も100本の縫い針を飲み込んだという。さすがにエルンストはそれは疑わしいと伝えるものの、その後の21日間で68本もの針の排泄が確認された。

結局両親の同意も得て、他の医者とも相談し、その後4月25日から彼女を軟禁状態

33) その他の問いは以下の通り。「この話は信憑性があるか、それとも彼女は意図的に嘘をついているのか」「本当なら、同じような例はあるのか」「もし最初から患者の発言を正しいと確信していたら、より良い治療ができたか」「20本の針の内18本は完全に酸化しており、他の2本やその後排出されたものは酸化がわずかで黄色く溶解しているのはなぜか」

にし、エルンストは彼女の腸や排泄の観察をはじめ。25日には針が2本直腸にあるのを確認し、抜こうとするが一本が半分で折れてしまう。さらにその後の三日間で20本ほどの針が排泄されるのを確認する。しかし28日夜中、彼女は体調が悪化し胃の激痛と心臓の不安を訴え、このまま手術せず助けてもらえないなら、自分で身体を開くと主張した。嘔吐もしたがその中に針はなく、何回か排便したその中に3本の縫い針が確認されたという。29日の夜7時に熱、発作、腹痛の症状が起り30日に容体が戻るも、エルンストは軟禁して観察することを諦め、親元に帰すことを決断した。

その後5月21日までエルンストは彼女を診察したが、彼女は右の腰や腹、足に痛みを訴えるも特に診察では異常は認められなかった。その間5月5日から15日までに彼女は40本の針を排泄したという。結局彼女はエルンストに合計130本ほどの針を渡し、そのうち一部はエルンストが排泄されたことを確認した。だが彼女の言ったことが本当であるなら、彼女は160本以上を気づかずに排泄しているか、まだ体内に残っており、エルンストはその後も観察を続けるつもりだった。だが5月21日以降は彼女は他の医者のところに行ってしまう、エルンストとはそれっきりとなった。

以上が事の顛末であるが、エルンストはよほどこの患者の話が気に入っていたようだ。というのも診察から13年もたった1836年12月に、エルンストはチューリヒに亡命中の息子のゲオルクに送った荷物の中にこの患者の鑑定書が所収された本を同梱し、同封の手紙に次のように記した。

箱の中にはほかのものに混じって、わたしの「留め針の事例」が二部入っているが、これは荷造りのさいに故紙として使ったものだ。もしかするとおまえの生徒たちにこれを利用して、話を聞かせてやれるかもしれない。

(1836年12月18日 父エルンスト・ビューヒナーから)³⁴⁾

マールブルク版は、ゲオルクがちょうどこの時『ヴォイツェク』を集中的に書いていたことを推測しているが³⁵⁾、とすればこのエルンストの鑑定書が『ヴォイツェク』に何らかの影響を与えている可能性がある。マールブルク版はそこまで言及しておらず、それゆえこの鑑定書がビューヒナー作品に与えた実際的な影響についても書かれていない。だがペーンケとサルコヴィッツは、『ヴォイツェク』の豆の実験の場面

34) Büchner, Georg: a. a. O., Bd. 10. 1, S. 113. (日本語訳は『ゲオルク・ビューヒナー全集——全二巻』第二巻, 141, 142頁。)

35) Ebd., Bd. 7. 2, 2005, S. 195.

に父親の鑑定書の影響があったと指摘する。

ドクター ヴォイツェク、もうエンドウ豆は食ったか？——学会に革命が起こるぞ。学会などこっば微塵にしてやる。尿素 0.1, 塩化アンモニウム, 過酸化物。
ヴォイツェク、もういっぺん小便しなくて大丈夫か？ ちょっと便所に入って気張ってみろ。³⁶⁾

彼らは、この場面を当時の栄養生理学をはじめとする自然科学の実験中毒的な態度を皮肉るものと考え、「人体実験についてのゲオルクの見解がこの場面ほど鋭く表現されている箇所は他にない」と同時に、「留め針の嚙下による自殺の試み」の鑑定書に見られる針を飲み込んで排出するというばかげたグロテスクな繰り返し、この場面に何らかの影響を与えている可能性を指摘する³⁷⁾。

一方で彼らは、父親との関係については、この場面からゲオルクの父への批判を読みとることはできないと主張する³⁸⁾。確かにグロテスクなのは針を飲み込んで排出するという行為を繰り返すことに加え、それをわざわざ見せつける患者の女性であり、診察するエンストとはその点では無関係である。だがゲオルクが父を批判的な目で見ていなかったとするのは拙速である。そのことを考えるには、父親のこの患者に対する扱いを見なければならぬ。というのもエルンストは、この女性患者のことを「針人間」と鑑定書の中で侮蔑的な名で呼び、「この針人間と次回は裁判医として解剖台で会うようなことになったなら、必ずや私はもう一度続きを報告しよう」³⁹⁾とおよそ人間的な扱いをしているとは言い難い表現をしているからである。

非人間的な扱いは鑑定書の表現にとどまらない。上述のように、300本の針を飲み込んだとの話に半信半疑のエルンストは、彼女を診療所の一室に数日泊らせ、外部との接触を断ち彼女の食事と排泄を管理し観察する。診察のためとはいえ、若い女性をためらうことなくこのように扱うエルンストの姿勢には、医者としての冷徹な一面が見て取れる。彼女がその後他の医者のところへ行っただけなのは、このような扱いに耐えられなかったのか、それとも直接的な治療をしてくれないエルンストに業を煮やしたからだろうか。

36) Büchner, Georg: a. a. O., Bd. 7. 2, S. 27. (日本語訳は『ゲオルク・ビューヒナー全集——全二巻』第一巻 182 頁。)

37) Boehncke, Heiner und Sarkowicz, Hans: a. a. O., S. 120 und 128.

38) Ebd., S. 120.

39) Büchner, Ernst: a. a. O., S. 39.

このように患者に感情移入することなく、ひたすら客観的に医学的对象物として患者を観察する父をゲオルクはどのように見ていたのだろうか。そのことを考えるには、犬の実験報告も役立つかもしれない。

この当時一家は、ダルムシュタットのエリザベータ通りに住んでいたが、上述のようにエルンストは飲み込んだ針が身体に与える影響をはかるために、その家の中庭でダックスフントを飼うことにした。この犬が実験用の犬であることは長男のゲオルクにだけは知らされていて、そのうえで父は彼にこの犬の世話もさせていた。結局犬は12日間ビューヒナー家にいたが、最終的にエルンストはこの犬に大量に針を飲ませ解剖した。実験用の犬とはいえ一緒に生活してきた犬に大量の針を飲ませて殺すことは、10歳の少年には衝撃的な事件であったろう。大人になったゲオルクはこの鑑定書を読み、当然当時のことを思い出したにちがいない⁴⁰⁾。幼少の頃のゲオルクは、12歳の時に父親に誕生日プレゼントとして贈った作文に見られるように、他者を犠牲として英雄的な行動をとる船長に父の姿を重ね賞賛していた⁴¹⁾。しかし青年期以降はむしろ後述するように、極めて現実的なエルンストとそうはなりきれない自分との違いをゲオルクは認識していたと考えられる。であれば、実験のために大量の針を犬に飲み込ませて解剖する父の姿や、若い女性を軟禁状態にして排泄まで管理・観察する父の鑑定書に、大人になったゲオルクが違和感を持った可能性はないだろうか。戯曲『ヴォイツェク』で人体実験を繰り返しヴォイツェクに課すドクターの人物造形に直接的な影響を与えているのは、これまで指摘されてきたようにギーゼン大学の教授ヨーハン・ベルンハルト・ウィルブラントであろう⁴²⁾。しかし「ドクター」という人物を描く時に、ゲオルクの頭に最も身近なドクターである父の姿が思い浮かばなかったと考えるのはあまりに不自然である⁴³⁾。そしてドクターの姿に影響を与えたゲオルクの中の父の姿が、幼少のときに思い描いていた英雄的なものであったとは限らないのだ。

4

そのことを検討するために、エルンストによる鑑定書をさらに二つ、補足的には

40) Vgl. Boehncke, Heiner und Sarkowicz, Hans: a. a. O., S. 127.

41) ゲオルクはこの作文の中で、エルンストの選民主義的とも言える思想におもねるように、難破した船で一般の乗客400人を見捨て真っ先に救命ボートに乗る船長を英雄として描いた。

42) Vgl. Büchner, Georg: Werke und Briefe. München, Wien 1980, S. 423.

43) クルツケは、『ヴォイツェク』のドクターだけでなく大尉の人物造形にも父エルンストの影響があると指摘している。Vgl. Kurzke, Hermann: Geschichte eines Genies. München, 2013, S. 436ff.

あるが見てみたい。まず「職務中に上司に暴行をふるったある兵士の精神状態について」を取りあげたい⁴⁴⁾。

鑑定書のタイトルになっている兵士クリストフ・ユンガーは、突然怒りの発作に襲われ勤務中に上司である伍長をサーベルで刺したとして、1824年1月にダルムシュタットで軍事裁判にかけられることとなった。この兵士はこの三年間あまりとても勤勉に働いていて、模範的で実直であると上官たちや同僚たちから高い評価を得ており、上官も日頃の彼の行いからは今回の犯行が想像できないと証言した。さらに彼が精神障害を抱えていたことを推測させる証言も出てきたことから、このような罪を犯したのは精神状態に問題があったからではないかという疑いが出て鑑定が行なわれることとなった。最初の鑑定で、被告は犯行時に寝ぼけて意識がない状態で、それゆえ自由意志がなかった可能性が指摘されたものの、その内容や証言の信頼性に疑義が出て、エルンストが第二鑑定人として鑑定を依頼された。第一鑑定書がわずか数ページで、ほとんど証言のみを論拠にして推測しか述べなかったのに対し、エルンストは過去の事例と生理学や心理学などの学問的知見に基づき、法医学的観点からより詳細な鑑定を行い、被告は寝ぼけていたか一時的な精神錯乱に襲われた状態にあり、意識も自由意思も無い状態で犯行が行なわれたので、彼に責任能力は無いと考えざるを得ないと結論付けた⁴⁵⁾。裁判所は、この鑑定書が書かれた約3ヶ月後の1824年6月24日に被告に無罪を言い渡した。エルンストの鑑定書が判決に大きな影響を与えたことは、伍長が被告を刺激し怒らせたという理由で裁判後に拘束されたことから明らかである。というのも、これはエルンストの鑑定書に基づくもので、エルンストは被告が犯行に至った理由を詳細に調べ、むしろユンガーが寝ている間に長時間にわたり伍長が彼に対して行った暴力行為がユンガーが悪夢を見て寝ぼけて暴力を振るった原因の一つであることを明らかにしたのである。

前述したようにベーンケとサルコヴィッツが、クラールスよりエルンストの方が「人間的」であると述べるときにはこの鑑定書のことが念頭にあって考えられる。結果としてエルンストはこの兵士を無罪に導いたのだが、ベーンケとサルコヴィッツは多くの精神異常の証言があるにもかかわらず二回にわたってヴォイツェクに責任能力があるとしたクラールスと比較して、このエルンストをより「人間的」であると指摘したのである。エルンストは、過去の類似の事件やそれまでの学問的知見を詳細に検討したうえでこの結論に至ったが、結果としてこれは関係者の身分差や、犯罪者は罰せら

44) 以下この鑑定書の内容については、Büchner, Ernst: a. a. O. の40頁以下による。

45) Ebd., S. 65.

れるべきであるという社会的要請を無視することになった。また過去の事例や知見をもとに科学的に事象を検証しようという態度は前出の鑑定書にも見られるものであったが、この「職務中に上司に暴行をふるったある兵士の精神状態について」では、さらに事例を司法に照らし合わせ法学的にも判断しており、その客観性と信頼性は極めて高い。エルンストもそのことを強く意識していたのだろう、判決に役立ったのは第一の鑑定書より自分の鑑定書であるとわざわざ鑑定書の後書きに付け加えている⁴⁶⁾。

だが彼らが鑑定した人物の罪状は、クラールスのものは殺人であるのに対してエルンストのものは傷害で、そもそも単純に比較できるものではない。また社会的要請に従ってヴォイツェクを有罪にしたクラールスより、あくまで「科学的」検証に忠実に兵士を無罪にしたエルンストの方が「人間的」と言えるかは議論の余地があろう。確かに医学的現象についての彼の知見は、道徳的しきたりや罰することに執着することで曇らされはしない。しかし一方でそのような姿勢を崩すことのない彼の鑑定書には、しばしば患者に寄り添う姿勢が感じられない。彼は努めて客観的に、そして医学的なことも身体的なことも性的なことさえも徹底的に検証し、その結果を赤裸々に記し説明する。それは彼が徹頭徹尾プロの医者であったことの証なのであるが、一方で前出の「留め針の嚙下による自殺の試み」の女性を軟禁して観察した事例などはその極端な例で、少々度が過ぎていようにも見える。それだけでなく、鑑定書に「針人間」などと侮蔑的な書き方をしていることから、彼にとって患者はあくまで観察の対象であるということはもちろん、相手によっては自分と対等ですらないという意識も看取される。

この意識は最後に紹介する鑑定書「運良く成功した自己去勢の観察」に顕著である。この鑑定書は自分で去勢した男についてのものである⁴⁷⁾。ブラシ職人であったこの患者は虚弱体質で勤勉、もの静かであったといい、それゆえこの事件は多くの人を驚かせたようだ。彼は郊外の森で血まみれで見つかり、当初は事件と見なされ警察が捜査を始めるまでになった。大事になってはまずいと考えたこの男が、杭を飛び越えようとして怪我をしたと嘘をついたため、当初真実は分からないままだった。運び込まれた病院でその後エルンストが診察をし、その時に彼が自分でペニスを切り取ろうとしたと真実を話しようやく事実が判明する。

エルンストはこの男の傷の経過を報告するとともに、彼から聞き出した去勢に至るまでの経緯と去勢の方法について詳述する。エルンストは、自己去勢は決して珍しい

46) Ebd., S. 66f.

47) 以下この鑑定書の内容については、Büchner, Ernst: ebd.の68頁以下による。

ことではないので医学的な処置について何か新しいことを言うつもりはないとし、その方法と、とりわけその動機に関して興味を示す。ここからはエルンストが対象人物の内面に強い関心を持っていたことがうかがわれるが、こういう点はゲオルクに受け継がれたと考えてよいだろう。エルンストはこの患者が快感を持たないのに射精を繰り返すことに不潔感や苦悩を感じたことを聞き出すものの、その原因としては若いうちの過度の自慰行為である可能性を指摘し、過去の事例を8点挙げて動機を比較する。だが多くの動機を検討したあげくに、彼はそれら過去の事例の男性はみな馬鹿ばかりで、しかも馬鹿になった原因は自慰行為のし過ぎであると断言するのである。今回の患者は厳密に言えば他の例と異なり馬鹿とは言えないし、彼が去勢したのは心身の苦痛から解放されたいがためのもので、彼はその目的を達成したと述べるが、一方で彼もやはり自慰のしすぎで馬鹿になったということを否定しない。既に述べたように、エルンストは最初に取り上げた鑑定書で、患者に対して「針人間」と明らかに見下した物言いをするだけでなく、「この針人間と次回は裁判医として解剖台で会うようなことになったなら、必ずや私はもう一度続きを報告しよう」と、医者であるにもかかわらず患者の命を軽視するようなことまで書いている。この鑑定書でも、去勢した男たちを自慰のしすぎで馬鹿になったと断言する時、患者に対して冷徹と言うよりは、むしろ見下し馬鹿にする態度が顕著であると言えるだろう。

5

以上三点の鑑定書からは物事を事実に基づき徹底的に科学的に検証するエルンストの姿勢が見られる一方、患者を見下し非人間的に扱う態度も見られる。息子のゲオルクが前者の自然科学的姿勢を父から受け継いでいることは確かである。そのことは彼の自然科学研究に顕著だが、それのみならず、戯曲『ヴォイツェク』や『ダントンの死』で歴史的資料を大量に参考に行っている手法などからも見て取れる。グツコーが彼の作品を評して、その中心的な長所である類まれな偏見のなさや、書くもの全てに表れているほとんど死体解剖とでも言いたいものは、医学研究に負っていると述べたのはよく知られているところである⁴⁸⁾。

二番目に取り上げた「職務中に上司に暴行をふるったある兵士の精神状態について」の鑑定書で検討したように、エルンストは自然科学者として、たとえ科学的検証によって導き出された結論が社会の要請と相容れない場合であっても前者を尊重するとい

48) Büchner, Georg: Sämtliche Werke. Hrsg. von Henri Poschmann unter Mitarbeit von Rosemarie Poschmann. 2 Bde. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 1992 und 1999, Bd. 2, S. 441.

う姿勢を崩さなかった。ゲオルクが父のこの鑑定について読むか聞くかして、社会的要請に屈せず科学的論理性を持って物事を判断することを学んだ可能性もあるだろう⁴⁹⁾。そのことは、ゲオルクが戯曲『ヴォイツェク』にヴォイツェクが社会的差別を受けている描写や彼の異常行動の描写を——鑑定書には書かれていなかったにもかかわらず——入れたり、この世の不条理を訴える老婆のメルヒェンを創作し挿入したことから推察される⁵⁰⁾。これらの場面の挿入により、戯曲内のヴォイツェクの犯罪責任能力が軽減されているとも解釈できるからである。これは実在のヴォイツェクは精神異常の状態になかったと断言し⁵¹⁾、有罪にしたクラールスの「ヴォイツェク鑑定書」への一種の異議であったとも考えられるが、社会的要請に屈せず上官に暴行をふるった兵士を無罪にした父親の影響がここにあった可能性も指摘されてよいだろう。

しかしゲオルクが、クラールスの作成した鑑定書から彼なりに客観的に判断した結果ヴォイツェクに責任能力が無いと考え、その思いを戯曲に織り込んだとすれば、それは彼が批判しようとしたクラールスと同じ「不正」をしていることとなる。つまり、罪人は罰せられるべきであるという社会的要請を慮り、ヴォイツェクの異常な言動を軽視し科学的とは言えない態度で責任能力ありとしたクラールスと、ヴォイツェクには責任能力は無いと考え鑑定書に無いことまで書き込んでそのことを訴えたゲオルクは、どちらも科学的検証を軽視していると言えるからだ。もちろん客観的で科学的な検証が求められる鑑定書と娯楽性や創造性こそが求められる戯曲を比較することに無理はあるが、このようなゲオルクの検証方法と社会に対する姿勢の特徴は、自分の患者を「針人間」と呼んだり自慰行為のしすぎで馬鹿になったと言う父のエルンストと比較するとより鮮明になる。

49) ゲオルクがこの鑑定書を実際に行ったかどうかは分かっていない。

50) 老婆のメルヒェンは以下の通り。「昔々、かわいそうな子供がおりました。その子はお父つっあんも、お母さんもおりません、みんな死んでしまい、この世にはもう誰もいなかったのです。みんな死んでしまったのです。そこでその子が出て行って、昼も夜も泣いていました。この世にはもう誰もいないので、その子は天に昇ろうとしました。するとお月さまがその子を優しくに見つめてくださったのです。その子がやっとお月さまのところに来ると、お月さまは腐った木のかけらでした。そこでその子はお日さまのところに行きました。お日さまのところに来ると、お日さまは枯れた向日葵の花でした。その子がお星さまのところに来ると、お星さまは百舌鳥が桜の木の下に突きさしておくような、金色の蠅だったのです。その子が地上に戻ろうとすると、地球はひっくり返った壺になっておりました。その子はいまでもそこに座ったまま、ひとりぼっちでいるのです。」(Büchner, Georg: Marburger Ausgabe, Bd. 7. 2. S. 8f. 日本語訳は『ゲオルク・ビューヒナー全集——全二巻』第一巻, 196頁)

51) Ebd., S. 260.

エルンストの患者に対するこのような態度は確かにしばしば差別的ではある。だが彼なりにではあるが、医学的・科学的に検証した結果、兵士に責任能力がないと判断し、またブラシ職人の去勢の原因を自慰行為に求めた。一方でゲオルクが父と異なる点は、社会的に弱者と見なされるような人々がそのような行動を取る理由の検証が、個人の精神状態の分析にとどまらず人間社会や人間そのものにまで及ぶことである。そしてゲオルクは、これがおそらくエルンストとは決定的に異なる点だが、そのような人たちに共感しているようにさえ見える。この自分も彼らになり得るという共感や絶望にも似た思いは、いわゆる「宿命論の手紙」や前述の『ヴォイツェク』の老婆のメルヒェン、『ダントンの死』のダントンの独白などに見て取れる⁵²⁾。

1834年1月末にゲオルクから婚約者に宛てた「宿命論の手紙」の一部を引用する。

「ぼくは革命の歴史を勉強していたんだ。歴史の恐ろしい宿命に打ちのめされるような気がした。人間の本性は恐ろしいまでに同じだし、人間が置かれている状況には避けがたい力が、誰に限らずすべての人間に加えられている。一人ひとりの人間は波間に浮かぶ泡にすぎず、偉人などはほんの偶然の産物、天才の支配は人形劇で、鉄の法則に対する笑止な悪あがきだ。この法則は認識するのがせいぜいで、支配などできはしない。ぼくはもう、歴史に登場する飾りたてた駄馬のような人間にも、罰せられて隅に立たされた人々にも頭を下げる気にはなれない。ぼくは自分の目を血に慣れさせた。でもぼくはギロチンの歯ではない。人間は、生まれおちるとすぐ、必然という呪いの言葉のひとつで洗礼を受けた。「罪の誘惑が来るのは避けられない。だが、それをもたらす者にわざわざあれ」——という言葉には身の毛がよだつ。ぼくたちのなかで嘘をつき、人を殺し、盗みをはたらいっているものは何なのか。」⁵³⁾

52) ダントンの台詞を一部引用する。「罪の誘惑は必ず来る、しかし罪の誘惑をもたらす者はわざわざである」、という調子だ。——必ず来る——あの事件はこの必然という奴だったのだ。必然の呪いのかかったおれのこの手を、呪う者は誰だ？ 必然などという言葉が誰が語ったのだ？ 一体誰が？ おれたちの内にあつて、姦淫し、嘘をつき、盗み、人を殺めるものは何だろう？ おれたちは見知らぬ力によって糸で引かれる操り人形に過ぎない。おれたち自身は無だ、無に過ぎない！ おれたちは幽霊が闘いあう剣にすぎないのさ。昔話にあるだろう、剣を操る手だけが見えないのだ。」 Büchner, Georg: a. a. O., Bd. 3. 2, 2000, S 41. 日本語訳は『ゲオルク・ビューヒナー全集——全二巻』第一巻、52頁)

53) Büchner, Georg: a. a. O., Bd. 10. 1, S. 30f. (日本語訳は『ゲオルク・ビューヒナー全集——全二

ここには、ある個人の破滅や絶望にとどまらない、それらを生まざるをえない人間社会や人間存在そのものへの言及、そしてさらにはそうならざるを得ない無力な「私たち」の姿が描かれる。そしてその共感作品の中にとどまらず、彼を革命運動という実際の行動にまで駆り立てたのである。

6

父と息子のこのような違いはいったい何に起因するのか。先述したように、エルンストはナポレオン最良ではあったが、あからさまな反権力志向などは持っていない、少なくとも外面的には保守的な人間であった。次男ヴィルヘルムは父を「用心深い人」で「ある政治的方向性が息子たちには危険であることを、早くから知っていた」と書いている⁵⁴⁾。一方でゲオルクは、革命運動の愚かさを笑い、その成功可能性を皮肉り強く否定しながらも、運動に身を投じ、その失敗から命を危険にさらし亡命せざるを得なくなる。

社会的要請に動じることなく客観的・科学的鑑定書を書き上げたエルンストが、自身の保身のためには人一倍社会的立場を気にしていたのに対して、ゲオルクは自身の作品で社会の現実を暴くため科学的事実をねじ曲げることも厭わない一方、自身の社会的保身などまったく考えず革命運動に身を投ずる。科学的検証と保身に関する二人の態度は鮮やかなままで対照的である。自身の社会的立場まで含めて極めて冷静かつ客観的判断を下す父に対して、ゲオルクにとって科学的根拠は社会や弱者の現実を暴くための道具で場合によっては自在に変更可能なものであったし、革命運動が仲間内からの密告や救おうとした農民から警察へ連絡が行ったことであっけなく破綻したことを見ると、革命運動に関しても冷静な判断ができていたとは言い難い。

この違いは言い換えれば、社会の要請に応じて身の処し方を変えるか変えないか、さらに言えば変えるつもりがあるかないか、変えられるか変えられないかの違いだったとも言えるし、「社会」の範疇をどこまでと考えるかの違いによるものとも言えるのではないだろうか。これは、人間を見るときに科学的に見ることに徹することができるかできないかの違いでもあり、自分の属する社会にどこまでの人々を入れて考えるのかの違いでもあろう。後にも見るようにエルンストにとって自分と患者の線引きは厳然たるものであったが、ゲオルクにとって自分と下層の人々の区別は極めて曖昧な

卷』第二卷, 67頁。)

54) Büchner, Georg: Werke und Briefe. Gesamtausgabe. Wiesbaden 1958, S. 567. (日本語訳は『ゲオルク・ビューヒナー全集——全二卷』第二卷, 272頁。)

ものだった。

ナポレオンを崇拜しながらヘッセン大公国に身を奉じるエルンストの心理も非常に複雑なものであったと推察される。これは、エルンストの時代のドイツ人がフランス革命とその後のナポレオン支配に持っていた複雑な思いとも重なる。フランス革命はエルンストが三歳の時のことであったが、当時のドイツ文化人らには専制に対する理性の革命と捉えられドイツの改革を望む声につながる。しかしその後フランス革命が急進化・過激化すると知識人の大勢は革命を嫌悪するようになった⁵⁵⁾。さらにその後のナポレオンによる支配はドイツに屈辱をもたらした「外国支配」に対する反感につながるが⁵⁶⁾、一方でその支配下でドイツは多くの面で近代化をとげる。だがエルンストは、そのような複雑な思いはおくびにも出さず、ナポレオンを崇拜し続けながら、息子が反政府運動をして指名手配をされてもヘッセン大公国で出世を重ねる。

一世代後の息子ゲオルクにはフランス革命やナポレオン、そして自分の祖国をも含めた社会や歴史、人間そのものへの絶望感があったと考えられる。子どもたちにフランス革命の崇高な理念を語る父親を持ちながら、ゲオルクはフランス革命の思想を父親のように素直に甘受することはできなかった。ゲオルクが生まれた翌年の1814年から1815年にかけてウィーン会議が開かれ、メッテルニヒの反動体制が始まる。フランス革命はごく一部の人に自由と平等をもたらしただけで、その後再び自由主義が弾圧される時代にビューヒナーは生きた。本当に救われるべき庶民や最下層の人々はフランス革命では救われず、せいぜいブルジョワが貴族や王族に変わって権力を増大させただけという失望もあっただろう。エーリヒ・ケストナーは、このような絶望感を持ちつつ革命運動に参加したビューヒナーを評し、「希望無き闘士」であり、「宝くじを買わなければ大当たりはない」という信念のもと「籤に実際に参加した若き反逆者であった」と述べている⁵⁷⁾。その評が正しいかどうかはここでは言及しないが、父親のようにフランス革命を受容していなかったことは間違いない。それどころか「宿命論の手紙」や老婆のメルヒェンからは、彼が感じていた人間やこの世界そのものに対する絶望感やケストナーの言う希望の無さまでもが読み取れる。このようなフランス革命の現実を契機とした人間存在そのものへの深い絶望感ゆえに、ゲオルクの目は否応なく社会の中で道を踏み外したり破滅したりする人間の苦しみや悲しみへと向けられ

55) 参照：成瀬治、山田欣吾、木村靖二編『ドイツ史2』山川出版社、1996年、129-130頁。

56) 参照：上掲書、188-189頁。

57) Kästner, Erich: Rede zur Verleihung des Georg Büchner-Preises 1957. In: Büchner-Preis-Reden 1951-1971. Hrsg. von der Deutschen Akademie für Sprache und Dichtung, Stuttgart, Philipp Reclam jun. 1972, S. 49f.

たのかもしれない。なぜならそれが人間そのものの宿命であり絶望であるならば、彼らの姿は明日の自分の姿かもしれないからである。

エルnstは極めて冷徹かつ客観的に対象を観察し、鑑定書を書きあげた。そしてその原因を医学的に解明しようとする一方、患者とは厳然とした線引きをし、決して彼らに共感したりはしない。患者への侮蔑的態度はその現われの顕著な例であろう。ゲオルクは同じように客観的に対象を分析し原因を探るが、しかしその際、彼はその原因を単に医学的に解明しようとするだけでなく、社会的背景や人間存在への考察まで含めて、それがどうして起こらざるをえなかったかということを書き記そうと試みる。それどころか、人間存在そのものへの絶望にもかかわらず、むしろ絶望ゆえに彼らへ共感さえ覚える。そしてその共感ゆえに、「自分」と「彼ら」の区別は曖昧となり、父が大公国の役人であり、自身は経済的にも身分的にも恵まれていたにもかかわらず、革命運動を主導するまでに至る。

ゲオルクは「宿命論の手紙」を書いた直後に、自ら成功の見込みがないと言った革命運動を起し失敗し、亡命を余儀なくされる。父エルnstからは勘当されたが、これはヘッセン大公国に勤める立場にあるエルnstからすれば当然のことだった。その後エルnstが亡命先のゲオルクに愛情に溢れた手紙を送っていることなどから、この勘当が表面上だけのことだったとも考えられるが、そこにもまた息子ゲオルクとはまったく違う、エルnstの処世術が見られる。

さて、その後ゲオルクは父親と同じ医学を大学で学びながら、結局医者にはならなかった。人間を扱う父エルnstとは異なり、彼は動物を扱う解剖学の研究の道に進む。管見ではあるが、これまでこの理由について考察されたことはなく、解剖学が当時の最先端の研究分野であったので、その分野に進んだと推論されるくらいである。しかし、エルnstとゲオルクの違いを考慮すれば、あえて父と同じ道を進まなかった息子の姿が見えてくる。冷徹な医者としての父の姿を間近で見てきたゲオルクは、人間を対象とするにもかかわらず人間味が感じられないほど冷静かつ客観的に診察を下さねばならない医者という職業に、いつしか抵抗を持つようになったのではないだろうか。クルツケは『ヴォイツェク』に登場するドクターとヴォイツェクの関係にエルnstとビューヒナーの関係が反映されているとし、そこにゲオルクの父親へのコンプレックスを見て取るが⁵⁸⁾、父への抵抗に加え自分は父のように生きられないという思いも、それをコンプレックスと言えるかどうかは措くとして、ゲオルクにはあったかもしれない。

58) Vgl. Kurzke, Hermann: a. a. O., S. 436ff.

先に引用した「宿命論の手紙」の中で彼が、「ぼくたちのなかで嘘をつき、人を殺し、盗みをはたらいているものは何なのか。もうこれ以上この考えを問いつめていくのはいやだ。」と書く時、「ぼくたち」というのは人間存在全体を指しており、上述したように、人間そのものに対する絶望が吐露されていると考えられる。しかし、ここで打ち明けられているのは、卑小な見方になるかもしれないが、人間存在そのものへの絶望というだけでなく、父エルンストのようなまっとうな道を進めない自分、つまり「嘘をつき、人を殺し、盗みをはたら」く彼らと同じようにまともには生きられない「ぼく（たち）」の本性＝必然の自覚ではないだろうか。この手紙を書いた直後に彼は革命運動を実行し、実際に犯罪者として追われる身となる。そして父エルンストに勘当されて二人の人生は完全に別たれ、その後二人が会うことは二度となかった。ゲオルクは、父とは異なる解剖学者として23歳という若さでチューリヒ大学に私講師として招かれた直後に、チフスでこの世を去ることになるからである。エルンストがああ「留め針の鑑定書」をゲオルクに送ったわずか二ヶ月後のことであった。

父から学んだ革命そして医学は、ゲオルクの中で少しずつ父とは異なったふうに醸成されていった。その違いは徐々に大きくなり、ゲオルクを父とは異なる文学、革命、そしておそらく早すぎる死へと導いた。それはまた自分が一生を捧げる仕事を選ぶ時にも、医者と解剖学者という違いとなって現れたのである。

Die medizinischen Gutachten von Ernst Büchner und ihre Auswirkungen auf Georg Büchner

Takushi TAKEUTCHI

Georg Büchners Vater Ernst Büchner war als Gerichtsmediziner an mehreren Gutachten beteiligt und veröffentlichte zwischen 1824 und 1826 sechs Gutachten in zwei medizinischen Fachzeitschriften. In diesen Gutachten kann man seine gründliche wissenschaftliche Auseinandersetzung mit den Fakten erkennen, während er aber gleichzeitig eine herablassende Haltung gegenüber seinen Patienten zeigt und ihr Verhalten ins Lächerliche zieht. Als zum Beispiel ein 18-jähriges Mädchen zur Behandlung zu ihm kam und angab, Hunderte von Nadeln verschluckt zu haben, stellte er sie unter Hausarrest und beobachtete ihren Stuhlgang. In seinem Gutachten bezeichnete er sie verächtlich als „Nadelperson“. Er ging sogar so weit, das Leben seiner Patientin zu missachten, indem er schrieb „Da aber wohl unter diesen Umständen der Fall eintreten könnte, daß ich, als gerichtlicher Arzt, vielleicht noch einmal mit meiner Nadelperson, und zwar vielleicht am Sektionstisch, zusammentreffe, wo werde ich gewiß nicht verfahren, noch einen zweiten Nachtrag zu dieser Geschichte mitzuteilen.“¹⁾ In einem anderen Gutachten behauptete er, dass alle Männer, die sich selbst kastrieren, Narren seien und dass die Ursache ihrer Dummheit in übermäßiger Selbstbefriedigung liege. Für Ernst Büchner sind Patienten also lediglich Studienobjekte, die ihm keinesfalls als Menschen ebenbürtig sind. Andererseits schien er sehr besorgt um seine gesellschaftliche Stellung zu sein.

Im Gegensatz zu seinem Vater war Georg bereit, für seine literarischen Zwecke wissenschaftliche Tatsachen zu verzerren, um etwa die soziale Wirklichkeit aufzudecken. Seine Zeichnung des Woyzeck im gleichnamigen Drama weicht mehrfach von dem Gutachten über die Zurechnungsfähigkeit des historischen Mörders Woyzeck ab, um zu

1) Ernst Büchner. Versuchter Selbstmord durch Verschlucken von Stecknadeln. Hrsg. von Boehncke, Heiner und Sarkowicz, Hans, Berlin 2013, S. 39.

betonen, dass Woyzeck für seine Tat nicht verantwortlich war. Dabei geht seine Auseinandersetzung mit den sozial Schwachen über die Analyse des psychologischen Zustands des Individuums hinaus und verweist auf die menschliche Gesellschaft und die Menschen selbst. Und Georg scheint – dies ist vielleicht der entscheidende Unterschied zwischen ihm und Ernst – sogar mit solchen Außenseitern der Gesellschaft zu sympathisieren. Infolgedessen stürzte er sich auch ohne jeden Gedanken an seine eigene Sicherheit in die revolutionäre Bewegung. Die Einstellungen des Vaters und Sohnes zur Wissenschaft und zum Schutz der eigenen gesellschaftlichen Stellung stehen in einem scharfen Kontrast.

Aus ihrem Briefwechsel geht hervor, dass Georg die Gutachten seines Vaters (zumindest das "Nadelperson-Gutachten") gelesen hat. Nachdem Georg seinen Vater als kaltherzigen Arzt aus nächster Nähe erlebt hatte, entwickelte er möglicherweise eine Abneigung gegen den Arztberuf, der von ihm verlangt, Menschen in einer objektiven und somit distanzierten Art und Weise zu untersuchen, sodass er ihre Menschlichkeit kaum spüren kann. Hermann Kurzke argumentiert, dass die Beziehung zwischen dem Arzt und Woyzeck in „Woyzeck“ die Beziehung zwischen Ernst Büchner und seinem Sohn widerspiegelt, und darin erkennt er Georgs Komplex gegenüber seinem Vater²⁾. Zusätzlich zu diesem Widerstand gegen seinen Vater könnte Georg das Gefühl gehabt haben, dass er sich nicht wie sein Vater verhalten könne, ob das nun als Komplex anzusehen ist oder nicht.

In seinem sogenannten „Fatalismusbrief“ fragt er: „Das *muß* ist eins von den Verdammungsworten, womit der Mensch getauft worden. Der Ausspruch: es muß ja Ärgernis kommen, aber wehe dem, durch den es kommt, - ist schauerhaft. Was ist das, was in uns lügt, mordet, stiehlt? Ich mag dem Gedanken nicht weiter nachgehen.“³⁾ Mit „uns“ meint er die gesamte menschliche Existenz, und hier drückt sich seine Verzweiflung über die Menschheit selbst aus. Hier offenbart sich nicht nur seine Verzweiflung an der menschlichen Existenz an sich, sondern auch das Bewusstsein seiner Unfähigkeit, den gesellschaftlich akzeptierten Weg seines Vaters Ernst zu gehen, sowie sein Bewusstsein der Natur des Menschen und des *Muss* in „uns“ und „mir“, das die Menschen von eben jenem Weg abbringt und zu Außenseitern der Gesellschaft macht, die „lügen, morden und stehlen“.

2) Vgl. Kurzke, Hermann: Geschichte eines Genies. München, 2013, S. 436ff.

3) Büchner, Georg: Sämtliche Werke. Hrsg. von Henri Poschmann unter Mitarbeit von Rosemarie Poschmann. Bd. 2, S. 377.

Kurz nachdem er diesen Brief geschrieben hatte, gründete er eine revolutionäre Bewegung und wurde bald steckbrieflich gesucht. Sein Vater verstieß ihn, ihre Lebenswege trennten, und sie sahen sich nie wieder.